

脱青年期におけるキャリア形成への支援
- キャリア環境変化対応 (career adaptability) の構造 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
鈴木 真澄

要 約

本研究の目的は、脱青年期(新卒学生から初期キャリア)におけるキャリアの形成過程、キャリア環境との関わりを質的に分析し、若者のキャリア支援に還元すべく20代のキャリアの形成過程を明らかにすることである。新卒学生から初期キャリアへの移行期は今後のキャリアを形成していく上でも重要であり、また多様な社会的問題が起こりうる。しかし、この時期のキャリアの現状への質的研究は少ない。本研究では援助環境の設定に還元できるよう、心理学の分野で焦点を当てられてきたような個人の内的要因ではなく、外的な要因に目を向けた。また現代の日本の若者が抱えやすいキャリアの悩みを考える上で、有用であると思われる Planned Happenstance 理論に基づいたキャリアの視点も組み込んだ。脱青年期のキャリアを経験している社会人にインタビューを行い、その具体的エピソードに基づいて研究を行った。本研究では民間企業で働く社会人3年目から5年目の8名を調査対象者とし、得られた発話データはグラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に質的分析を行った。

その結果、キャリア形成過程の構造、キャリア環境と行動との関係を考える上で基礎となる6つのカテゴリーグループと27つのカテゴリーが生成された。学生期から初期キャリアへの移行におけるキャリアの形成過程は循環的構造となることが示唆された。PH理論の確認とともに、PH理論に必要な5つの要素や、花田(2003)がまとめたパリュースのストレッチングで前提とされるアクティブな要素だけが、パフォーマンスをより引き出せるキャリアの振る舞いではないこともわかった。本研究から個人のパフォーマンスには動的な行動と静的な行動があり、特にこの時期のキャリア形成には、環境から学ぶ、受容するというような静的な行動も重要になると示唆される。「キャリアをつくらねば」と焦り、悩む傾向にある20代の若者たちへの支援としてPH理論をカスタマイズするためにも、静的な行動の重要性は改めて見直すべきだと考える。各個人の内的要因に関わらず、個人の行動に影響を与える環境があったり、自分と環境との関わりの中で形成された要因が、個人のキャリアにおける今後の《action》の基礎となった。一方、【環境からの負担】など一見ネガティブな環境要因も、パフォーマンスや別の環境要因との関わりに繋がる要因であった。今後の課題として、環境要因と個人の行動の関わりや、個人の行動が環境に影響を与える可能性など、より深いカテゴリー間の関係性のデータも検討したい。対応パターンの把握や対応の採用・修正にも着目し、サポートに繋がられるよう実践的価値を深めていきたい。